

# 読書への誘い

＜第Ⅲ期 第27号＞通巻122号

1月も10日を過ぎました。年明けから冷え込みが厳しいですね。でもそんな寒さだからこそ、冬の夜空はあんなにも、美しいのかもしれない。オリオン座、カシオペア座、…あなたはいくつの星座が見つつけられますか？

## 言葉のダシのとりかた

長田 弘

かつおぶしじゃない。  
 まず言葉をえらぶ。  
 太くてよく乾いた言葉をえらぶ。  
 はじめに言葉の表面の  
 カビをたわしでさっぱりと落とす。  
 血合いの黒い部分から、  
 言葉を正しく削ってゆく。  
 言葉が透きとおってくるまで削る。  
 つぎに意味をえらぶ。  
 厚みのある意味をえらぶ。  
 鍋に水を入れて強火にかけて、  
 意味をゆっくりと沈める。  
 沸騰寸前サツと掬いとる。  
 それから削った言葉を入れる。  
 言葉が鍋のなかで踊りだし、  
 言葉のアクがぶくぶく浮いてきたら  
 掬ってすくって捨てる。  
 鍋が言葉もるとともにワツと沸きあがってきたら  
 火を止めて、あとは  
 黙って言葉を漉しとるのだ。  
 言葉の澄んだ奥行きだけがのこるだろう。  
 それが言葉の一番ダシだ。  
 言葉の本当の味だ。  
 だが、まちがえてはいけない。  
 他人の言葉はダシには使えない。  
 いつでも自分の言葉をつかわねばならない。  
 (詩集『食卓一期一会』晶文社・1987年刊)

『本当に生きるための哲学』(左近司祥子著・岩波現代文庫・2004年刊)

「本当に生きる」ということを、幸福とも言い換えたギリシアの哲学者たち。その言葉と生き方を紹介しながら、死とは、私の存在とは、自由とは何かについて思索をめぐらせる。日常生活の場面を織り交ぜ語るその語り口は、対話への扉を開くメッセージである。

「私が心掛けているのは、周りにいる他の人々に、私の語っていることが本当のことなのだと思います。当の私に思い込ませることだ。」

この台詞は、プラトンの『パイドン』という対話篇の中で、ソクラテスの口から投げかけられる。舞台は牢獄の中、時は紀元前399年、ソクラテスが死刑になるその日である。

ソクラテスは数多くの友人と、最後の時を対話に耽ろうというのである。話題は、当然、魂の不死である。これまで、多くの仲間から、死刑を逃れるようにとあれほど忠告されてきたのに、説得されることなく、その日を迎えたのである。しかも、それなのに、集った人々以上に爽やかな顔をしているとなれば、なぜなのだと聞きたくなるのは当然である。それに対してソクラテスは、知を追求していた哲学者なら、死は歓迎すべきものなのだよとかわす。生きているということは、知を求める魂が肉体の中に捕らわれているという状態であり、そのために、私たちは、どれほど知の探求を妨げられているのか計り知れないのだ、というのがソクラテスの言い分である。

確かに、肉体があるから、お腹もすくし、眠くもなる。着物を着る、家に住む。これらはみなかなりお金がいることであり、お金儲けにこれまた時間が取られることになる。肉体さえなければ、家も、衣服もいらなだろう。

肉体が邪魔になるのはこのことばかりではない。肉体は、しばしば、虚偽を教えるのだ。プラトンにある例ではないけれど、この間の事情を一番鮮明に伝えてくれるのは、あの、水を張ったコップの中に入れてお箸である。コップを通して見えるお箸は、いつの間にか、折れているのだ。

肉体さえなければ、こういった不都合は起こらないとソクラテスは言いたかったのだ。唯一の希望は、肉体からの魂の解放である。そして、これを完璧にやり遂げるには、死しかない。知を求める哲学者が死ぬことを歓迎するのはこのためである。

ソクラテスのこの見解が成立するためには、大前提が必要である。魂は、肉体から離れても、なお有り続けるということである。肉体から離れた魂が、消滅するしかないのだと言うことになるなら、死ねば知の探求は自由になるという期待は成立しない。そこで、ソクラテスは、せつづく友人たちのため魂不死の証明に努めることになるのである。ソクラテスは、なかなか納得しない友人を相手に、幾つかの証明をして見せるのだが、その合間に、冒頭の一句がソクラテスの口をつくのだ。

当時、アテナイは民主政治。紀元前五世紀の後半から、すでに、自分の語ることを他人にも真だと思ってもらふこと、あるいは、もっと豪腕に、真だと思わせること、それこそ人が生き抜いていくのに必要不可欠な技なのだと言主張し、自分こそその技を授けうるものだと宣伝活動に務めた人たちが登場していた。いわゆるソフィスト(=教師)群である。

世の人々にどう見えようと、ソクラテスは自分をその一群の人々から区別したがっていた。だから、その台詞は、ソクラテスのその思いを表したものと理解することができる。あの人たちは他の人々を自分の思い通りに説得しようとしているのだ、だが私は自分による自分の説得を第一と考えている。自分を誤魔化すことはできない。自分に嘘をつくことはできない。こういった、日常的な決まり文句からいっても、ソクラテスのこの台詞は、ソクラテスの、真実に対する真剣な態度を表すものとして感動を生む効果抜群の言葉である。でも何か変なのだ。…まさに死のうとしているこの段階で、今なお、自分に思い込ませるべく、自分に言い聞かせなくてはならないのだろうか。…

ソクラテスはこの人生で一番の大事である、死に逝くことについて、「自分の言ったこと、今言っていること、それは今もなお、自分が真実だと思いつめることなのかどうか」を時間の許す限り問い直していたに違いない。この問いの重さは、他のことではなく、自分の死についての問いだということにある。生き物殺しと同じで、訂正不可の問題なのだ。…

そしてソクラテスは死んだ。英雄の死のように、二千年以上も後の私たちにまで問題を投げかける死だった。…とはいえ、別のことが気にかかる。ソクラテスに死刑を言い渡した裁判員たちであり、その制度を支えていた民主主義である。民主主義は、自由を標榜している。自由が標榜できるのは、民主主義が相対主義に根ざしているからである。どの価値にも、上下はないとすることが基本なのだ。民衆は、それぞれの、そのときどきの価値から来る目的を目指して、揺れている風船のようなものである。風船には確固とした行き先はない。それだから、風船は強風に煽られるのだ。そして、強風の結果一所に固まると、自分と異なる動きをしている風船を異端視する。

あれほど、性別とか生まれとか時代や場所に捕らわれない、それらを超えた、普遍的な価値を追求していたソクラテスが、最後に、自分が与えている死の価値について、自分だけに妥当だと思いつませたい、自分だけを納得させたいと言ったのは、そういったわけもあったのだ。普遍は、根無し草の多数決ではなく、問いによって磨かれ、鍛え抜かれた自分の魂に納得するところにあるのだと言いつつ切ったのであったのである。

(岩波現代文庫版あとがき p.219-227)

